

これまでの年と同様ヤガ科が最も多かった。また、月別に示すと次の通りになる。

4月	4種
5月	10種
6月	8種
7月	2種
8月	5種
9月	6種

1982年は、梅雨期にはいっても雨が極度に少なく、武庫川敷の雑草が随分、枯死した。その上、8月初めには、第10号台風の豪雨による増水のため、武庫川敷内の草地在り冠水した。本来なら最も昆虫の多い6月中旬から8月末にかけて、一般的に昆虫が少なかったのは、これらの天候の影響ではないかと思われる。ただし、1978年の照明燈の完成時に比べて、宝塚大橋へ飛来する昆虫は全般的に減少していることも確かである。

今回の採集品中セスジヒトリは、1981年6月12日の某新聞紙上で「幻のセスジヒトリ 95年ぶり香川で発見」と報道されたが、その後の調査では各地で採集されていることが明らかになった種である。なお、筆者は、宝塚大橋から約1km下流の宝塚市美座2丁目において1980年8月31日に1頭採集していることを付記しておく。

兵庫県のオオキノコムシ (1) (兵庫県甲虫相資料・124)

高 橋 寿 郎

日本産のオオキノコムシ科 (Erotylidae) の研究史については中条道夫博士の名著 “日本動物分類, 大蠹虫科” (1936) に於いてその時代までを概説しておられる (この中で当時の日本産20属, 88種, 2変種が取扱れていた。いわゆる当時の日本であるから台湾、朝鮮産が入っていたものでそれらを除くと3亜科, 18属, 52種が扱はれたことになる)。そしてその後中条道夫博士、荒木東次氏、中根猛彦博士等による研究が続けられると共に中根博士の “日本の甲虫 (40~45)” (新昆虫, 11巻, 3, 5, 7, 10, 12号, 1958, 3亜科, 18属, 78種を取扱はれた) に於て日本産の総括をされると共に1963年原色昆虫大図鑑, 第2巻 (20属70種が図説されている) の中に多くの本科のものを原色で図説された。また中条博士は1969年 “Fauna Japonica : Erotylidae” を発刊 (本書には3亜科19属90種がふくまれている) 日本産の総まとめきべりはむし Vol.11.NQ1983.

を発表された。その後中根博士によって6新種(内1新種は中根博士が1961年に亜種と記載されたものを独立種に取扱れた)、1新亜種が記載されている(Fragm. Coleop. Pars. 22-28, pp. 98-99, 1977-1979., Rep. Fac. Sci. Kag'oshima Univ. (Earth. Sci. & Biol.), No. 14, P.43-53, 1981)。だから現在の日本産のオオキノコムシ科は3亜科, 19属, 96種, 1亜種になるかと思う。本州産だけを取りあげると3亜科, 18属, 72種1亜種である。

生態に就いてはその総合的なものは勿論, 1つの種に就いての完全な生活史の解明も現在ではまだ充分出来ているとは考えられないが一部の種に就いての卵, 幼虫等の幼期の記載とか断片的な生態に就いての報文はいくらか見られる(林, 中村, ニューエントモロジスト, 2巻, 3/4号, P.7-17, 1952, 野淵, 昆虫, 22巻, 1/2号, P.1-6, pl.1, 1954, 22巻, 2号, P. 53-60, pl. 8, 9, 1955, 宮武, 新昆虫, 8巻, 2号, P.6, 1955)。

兵庫県に産するオオキノコムシに就いてはまだ充分調べられているとは考えられず現段階での発表は時期尚早の感無きにしもあらずであるが今迄全くこの仲間に関する県下の総合的な報告の様なものが見当たらないので一応現時点でのものをまとめておき度く本文を叩き台に県下のこのグループの分布相がはっきりとする事を期待したいと思う。

同定に就いては上記文献ではご間違なく出来ると思うが尚浅学未熟のため誤りあるやもしれない。夫等に関して御教示頂ければ幸である。

Family Erotylidae

オオキノコムシ科

Subfamily Dacninae

1. *Dacne japonica* Crotch, 1873 シイタケホソオオキノコムシ*

本種はCrotch氏によって長崎産で記載された(Ent. Monthl. Mag. 9:188, 1873)。中条博士は食茸としてシイタケ, ヒラタケ, エブリコをあげておられる(1969)。幼虫もシイタケを害すると(中根, 1958)、分布は北海道からトカラ諸島迄広く日本特産と云われている。

シイタケの害虫として知られていると云うのであるがほとんど採集が出来ていない。記録も全く無い。したがって県下の分布状況のよくわからない種の一つである。

産地: 神戸市烏原(Iex., 27-1V-1972)** 城崎郡日高町堀[高橋, 1978]。

* 種の配列並びに和名は原則的に中条博士(1969)にしたがった。但し、一部最近の知見で変更している所もある。

** 産地のところで[]の中のものは文献からの引用、()の中のものは筆者所有標本による。

2. *Dacne picta* Crotch, 1873 セモンホソオオキノコムシ

本種は Crotch 氏によって "Japan, Throughout the islands." として記載された。G. Lewis 氏は冬期ケヤキの樹皮下で採集したとのべておられ (Ann. Mag. Nat. Hist. (5) 20 (115): 54 & 56, 1887)、林博士もケヤキの樹皮下に多くいると報告しておられる (New Entom. 2 巻, 3/4 号, P. 10-12, pl. ii, Figs. 1-13, 1952)。

中条博士は食茸としてカイガラタケ, エノキダケ, ノウタケ, ムラサキチドメ, ハナビラタケ, コルクタケ等多く記録しておられる (1969)。

分布は日本全土, トカラ諸島にまで分布している。

兵庫県下では諭鶴羽山では非常に多く採集されているのであるがその他での記録が全く無い。もっと産地はあるように思はれる。

本種の幼虫と蛹については林・中村氏の報告がある (1952)。

産地: 三原郡諭鶴羽山 [久松, 1973]。

3. *Dacne zonaria* Lewis, 1887 ズグロホソオオキノコムシ

本種は Lewis 氏により "Kiga, Miyanoshita, Nikko, Konose, Fukushima & Sapporo" を産地として記載された (I. C., P. 56, 1887)。分布は北海道, 本州, 九州であるが本州では比較的北の方にいるように思はれる。カワラタケなどの類につくようであるとのこと。兵庫県では扇の山での記録があるのみである。

産地: 美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972]。

4. *Megalodacne bellata* Lewis, 1883 カタボシエグリオオキノコムシ

Lewis 氏により原産地は明記されていないが "Japan: in all the islands" として記載された種である (Ent. Monthl. Mag., 20: 139, 1883)。中条博士は食茸としてカワラタケ, マンネンタケ, ニンギョウタケモドキ, サルノコシカケの類をあげられている (1969)。日本特産種で北海道, 本州, 四国, 九州に分布し中根博士によると夜間茸上に現れ比較的普通の種である (1958) と云うのであるが筆者、県下で採集したことが無い。

産地: 川西市笹部 [仲田, 1978], 氷上郡 [山本, 1958], 美方郡扇ノ山 [辻, 岸田, 1970]。

5. *Episcapha* (*Episcapha*) *fortnii* Crotch, 1873 フォーチュンオオキノコムシ

本種は "Hiogo, in fungi on firs, in great profusion" として Crotch 氏が記載した (Lewis leg., Ent. Monthl. Mag. 9: 188, 1873)。

中条博士は食茸としてカワラタケ、アラゲカワラタケ、ウスベニウロコダケを挙げておられる。
(1969)

日本の本州、四国、九州に産し、特に関東以南に産すると(中根, 1958)、また奄美大島、トカラ諸島から台湾、支那、印度支那に *subsp. consanguinea* Crotch が分布している。

幼虫に就いての報告はある(昆虫, 23巻, 1号, P.58-59, pl. ix, Figs. 21, 25 & 30, 1955., あげは, 8号, P.9, Figs. 3A-I & 4A-F, 1960)。

兵庫県下では神戸市内とか明石公園などには大変多いのであるが他の地での記録が思った程無い。もっと広く分布していると思はれるのだが。尚 *Episcapha* 属に関しては荒木東次氏(宝塚昆虫館報 65:1-6, 1950)及び野淵博士(昆虫科学, 1巻, 2号, P. 5-6, 1953)の報文は貴重である。

産地: 兵庫 [Lewis leg., Crotch, 1873]. 神戸市烏原 (2 exs., 19-VI-1980, 30 exs., 9-VIII-1980, etc.), 藍那 (1 ex., 5-VII-1978), 明石市明石公園 (3 exs., 15-VI-1975, 1 ex., 16-VIII-1976, 1 exs., 12-VI-1977, 2 exs., 9-VI-1978, 4 exs., 15-VI-1978, 8 exs., 24-VI-1978, 29 exs., 29-VI-1978, 2 exs., 7-VII-1979) 城崎郡三川山 [高橋, 1975].

6. *Episcapha (Episcapha) gorhami* Lewis, 1879 ゴルハムオオキノコムシ

Lewis氏により "Yezo" 産で記載された種である (Ann. Mag. Nat. Hist. [5]4(24): 465-466, 1879)。食茸としてはカワラタケ、ウラギンタケ、ミカワタケが挙げられている(中条, 1969)。北海道から九州までに普通に産する種のように晩秋、早春には樹皮下に見られるがカワラタケなどの多孔菌に普通であると(中根, 1958)、幼虫は野淵博士が報告している (Kontyu, 23巻, 1号, P.57 & 59, pl. ix, Figs. 20, 22, 24, 27 & 29, 1955)。

本種も兵庫県下では広く分布している。どちらかと云えば中央部から北の山岳地帯に多くいるように思はれる。

産地: 川西市見野, 芋生, 笹部 [仲田, 1978], 笹部 (4 exs., 9-IV-1978), 能勢妙見山 (5 exs., 30-VII-1982), 川辺郡猪名川町内馬場 [仲田, 1978], 槻並 (7 exs., 4-V-1979)。神戸市摩耶山 (6 exs., 15-VI-1979), 烏原 (1 ex., 5-V-1976)。神崎郡大河内町砥の峯 (1 ex., 6-VIII-1977)。宍粟郡音水 (1 ex., 24-VI-1973), 赤西 (2 exs., 3-VI-1979, 13 exs., 23-VI-1979)。出石郡出石町堀橋 [高橋, 1963]。養父郡水の山 (2 exs., 13-VII-1954, 4 exs., 2-VII-1957, 1 ex., 21-VII-1958)。美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1975]。

7. *Episcapha* (*Psiloscapa*) *morawitzi* (Solsky, 1871) モラヴィツオオキノコムシ

基本産地は "O. Sibirien" とある (Horae Soc. Ent. Rossicae, 8:266, 1871)。

日本全般から済州島, 朝鮮, 満洲, 支那, シベリアなど広く分布する種となっているが日本では稀な種のようなのである。Lewis氏が*E. taishoensis*と記載した種 (Ent. Monthl. Mag., 11:79, 1874)がこの種に当る。たゞし一般にこの種と同定されて来た種は*E. gorhami* Lewisらしいと(中根, 1958)。

県下から上記学名での記録がある。真の本種のことであるか又は同定違いであるか標本が見られないので良くわからない。真の本種となると大変珍しい種である。御影と云うが六甲山系と云う意味になる。良く調べなくてはいけない種である。

産地: 神戸市御影 [関, 1933]

Subfamily Triplacinae

8. *Encaustes cruenta praenobilis* Lewis, 1883 オオキノコムシ

Lewis氏により "Japan: fairly common in all the islands" として記載された種である (1883)。食茸としてはヒラタケ, ツリガネタケ, ツガサルノコシカケ, アシグロタケ, ミカワタケ, ウチワタケ, コフキサルノコシカケを中条博士は挙げておられる。原亜種*E. cruenta* Mac Leay, 1825はジャワに産する種で東洋区各地に広く分布し10亜種に別けられていてどちらかと云えば南方系の種である。

ところが日本に分布しているこの亜種は北海道, 本州, 四国, 朝鮮に分布しているとなっているが東北地方とか北海道には平地にも多くいるようであるが西南日本では山地に産して可成り珍しい種に属するようである。

兵庫県下の分布も北部山地にはいるようであるが筆者は未採集である。御影(六甲山系)の記録が注目される。

産地: 神戸市御影 [関, 1933], 養父郡氷の山 [高橋, 1955], 美方郡扇の山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1975]。

9. *Aulacochilus sibiricus* Reitter, 1879 ルリカタピロオオキノコムシ

従来*A. bedeli* Harold, 1880(基本産地・日光)として知られていた種である。中根, 中条両博士(1958, 1969)も言及しておられたが最近中根博士がS. M. I-Khnzorian氏の論文(1975)を紹介され(1976), 上記種に取扱うことが良いとの考へをのべておられる。

本州, 九州および台湾に分布し, 平地低山地に多いとのこと(中根, 1958), 中条博士は食

茸としてアラギカワキタケ、カイガラタケ、アラゲカワラタケ、カワラタケ、マツノネクイタケ、ツガルサルノコシカケ、キクラゲ等を挙げておられる(1969)。

蛹と幼虫に就いては新村氏の報文(植物及動物, 7巻, 6号, P.1065-1066, Fig. 2A-B, 1934), 幼虫に就いては野淵博士の報文(1954)が知られている。

兵庫県下では案外と産地が知られていない。

産地: 川辺郡猪名川町猪淵[仲田, 1979, 1982], 川西市能勢妙見山(5 exs., 30-VII-1982), 多可郡鳥羽(1 ex., 5-VII-1975), 相生市三瀬山(1 ex., 20-VII-1974)

10. *Aulacochilus japonicus* Crotch, 1873 ニホンカタビロオオキノコムシ

本種はG. Lewis氏採集による "On Maiyasan, Hiogo" 産でCrotch氏が新種記載された種である(Ent. Monthly Mag. 9:189, 1873)。北海道にはいないようだが本州, 四国, 九州, 伊豆大島, 朝鮮に分布し本州では普通種と云えると思う。中条博士による食茸も多く(1969), 蛹については高千穂, 安松氏の報文(Mushi, 11巻, 2号, P.198-199, 1939), 新村氏(1939), さらに幼虫は新村氏のもの以外に野淵博士(1954)のものがある。

兵庫県下にも多く産する種である。幼虫で越年し4月中旬から羽化してくるとある。

産地: 川辺郡猪名川町槻並(1 ex., 4-V-1979), 川西市笹部[仲田, 1978] 能勢妙見山(6 exs., 30-VII-1982), Hyogo, Mayasan [Crotch, 1873, Schonfeldt, 1887], 神戸市御影[関, 1933], 藍那(24 exs., 5-VII-1978, 8 exs., 7-IX-1978), 鳥原(1 ex., 30-VIII-1975), 須磨鉢伏山(10 exs., 9-VIII-1975), 明石市明石公園(1 ex., 18-IX-1976, 1 ex., 3-VII-1977, 1 ex., 10-VII-1977, 30 exs., 9-VI-1978, 1 ex., 14-VI-1978), 神崎郡大河内町川上(2 exs., 3-IX-1977), 氷上郡神楽[山本, 1958], 城崎郡温泉舎屋[高橋, 1975], 城崎町(1 ex., 25-X-1978), 養父郡氷の山(1 ex., 6-VII-1973, M. Yuma leg.), 美方郡扇の山[辻, 1963, 辻, 岸田, 1972]。

11. *Eutriplax tuberculifrons* (Lewis, 1887) ヨツボシツノオオキノコムシ

Lewis氏により "Miyanoshita, Chiuzenji & Sapporo in Yezo" を産地として *Eudaeonius* 属で記載された(1887), その後同氏により本属の種とし取扱われた(1889)。大変はっきりした斑紋を前胸背に有するのでよくわかる種である。和名のツノと云うのは♂の頭頂の瘤のことを云ったのでいくらか誇張しすぎると中根博士はのべておられる(1958)。♀にはこれがないので *Triplax* 属と区別が付きにくいとのこと。山地のヒラタケ, タモギタケなどに多いと。県下では北部山地帯での記録があるのみである。

産地：養父郡氷の山 [4 exs., 4-V11-1965, K. Tsuji leg.], 美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1975],

12. *Aporotritoma laetabilis* (Lewis, 1887) セグロチビオオキノコムシ

Lewis氏により "Ikenchaya in Yamato" (大和一軒茶屋)産の1頭(拘網の偶然の一振り)で採集, 22-V1-1881)でTriplax属で記載された(1887)。中条博士はTritoma属(1936), Pseudotritoma属の種として扱っておられる(1963)。最近再び中根博士はAporotritoma属に含めた方がよいとの考えを述べておられる(1976)。分布は本州, 四国, 九州となっているが比較的少い種のようにであり兵庫県下でも辻氏の音水での記録以外筆者は坂の谷で得ている。

産地：宍粟郡音水 [1 ex., 22-V-1965, K. Tsuji leg.], 養父郡坂の谷 (2 exs., 22-V11-1979),

(Augst. 1982)

キバネツノトンボ物語

松 本 健 嗣

キバネツノトンボ (*Ascalaphus ramburi* MacLachlan) は我国産扇翅亜目唯一の美麗種であり、且つ陽性で複雑活発な飛翔習性から蝶以外の昆虫では最も優美可憐なものと云ってもよからう。風薫る5月、輝かしい陽光の下、低灌木草原上を低く徘徊し時には翅を水平に展開したまま斜面上を低く軽快に滑翔し、又人の背丈程の高さを保って勢いよく一直線に飛んでゆく。特に無風の日にはギフチョウのようにヒラヒラと優しく飛ぶ。だがマツの花に群集するヒラタハナムグリ等に近づくと果敢に襲撃し、被捕食者が逃げると執拗に追いかけてゆく。

近畿地方で今迄に筆者が野外採集で若しくは標本により知った産地は次の4ヶ所のみである。

滋賀県八日市市布施町布施山 (1974 筆者)

大阪府寝屋川市香里園 (1962 宮崎俊行・晴久)

同豊能郡剣尾山々麓 (1960 自然科学博物館)

兵庫県小野市青野ヶ原 (1965-1975 筆者)

他1964年頃迄阪急・能勢電車が配布していた沿線採集案内(パンフレット)には川西市一ノ鳥居が産地として紹介されていた。またASIATIC INSECTS (1962)には近畿でたゞ一つ京都